

戦争が駆け足でやって来る！ (その11)

どんな時代でも戦争に行くのは子供たちだ！僕は銃をギターに！

全国津々浦々から、芸能人からも学者や学生からも「戦争法案反対」の声が上がっている。

「戦争が起こっても、僕たちが銃を持って行くんですか？行かないのに会議で論争をしているということに、僕は心が苦しくなります」。「歴史をひもとけば分かるように、どんな時代でも戦争に行くのは子供たちだ。僕のふるさとの知覧（ちらん）からも、（特攻隊が）飛び立っていった。子供たちが行くんですよ。僕ら『行かない人間』が議論しなくちゃいけないことは、絶対にこういうこと（戦争）をしないようにするにはどうすればいいかということだと思っんです」。

「現場に行くのは自衛隊員。震災を思い出して欲しい、どれだけのことを自衛隊はやったか。彼らを死なせるのか？死なせてしまっているのかということだと思っんですよ」「それを松本くんにはお笑いでやって欲しい。僕は銃をギターに変えてやるから」と訴えた。

（7月19日放送のフジテレビ系「ワイドナショー」より長淵剛）

『日本は戦争をしない国』という世界的な信用は失なわれる！

「戦争は、防衛を名目に始まる。戦争は、兵器産業に富をもたらす。戦争は、すぐに制御が効かなくなる。戦争は、始めるよりも終わるほうが難しい。戦争は、兵士だけでなく、老人や子どもにも災いをもたらす。戦争は、人々の四肢だけでなく、心の中にも深い傷を負わせる。精神は、操作の対象物ではない。生命は、誰かの持ち駒ではない。海は、基地に押しつぶされてはならない。空は、戦闘機の爆音に消されてはならない。血を流すことを貢献と考える普通の国よりは、知を生み出すことを誇る特殊な国に生きたい。学問は、戦争の武器ではない。学問は、商売の道具ではない。学問は、権力の下僕ではない。生きる場所と考える自由を守り、創るために、私たちはまず、思い上がった権力にくさびを打ちこまなくてはならない。」（自由と平和のための京大有志の会）

「士気は落ちるでしょう。これでは『総理が言う、積極的平和主義のため働こう』という気持ちにはなれません。最低限、彼らや家族の本音を聞く機会を、政治家は持つべきです。同時に、万が一の事態の際の補償や、残された遺族に対する年金の支払いなどもきちんとさせなくてはなりません。加えて、最低二つの条件を実行することが求められます。まず、全現役自衛官との再契約の実施です。具体的には、本土防衛を前提としたサービスの宣誓内容を、集団的自衛権の適用に沿って改訂させ、それができない隊員については、無条件で退職を認めることです。」（元自衛官 井筒高雄）

「もし戦闘に巻き込まれれば、敗戦後に築き上げてきた『日本は戦争をしない国』という世界的な信用は失われてしまいます。」（アフガニスタン・ペシャワール会 中村 哲 医師）